

独創性をつくるレポート指導

Tutorial program of report writing for the power up of students' originality

飯箸泰宏*

Yasuhiro IHASHI

*明治大学

Meiji University

概要

大学の定員増と少子化によって、入学時の受験競争が緩和されるとともに、年々、学生の知識レベルが下がっていることはよく問題にされる。しかし、それ以上に学生の創造性・独創性の低下も著しい。これらは大学受験向けに特化された「知性なき丸暗記」教育の結果と考えられるので、日本の大人全体の問題であり、個別学生らの責任を問うことはできない。気づいた大人はどこにいても若者にその能力を補ってあげることが必要になる。「知性なき丸暗記」に抗して学生の創造性を強化することを目的に、一つの実験的教育実践への挑戦を試みた。採用したテーマはレポート作成の学習である。この実験的学習実践の結果は、「知性なき丸暗記」への対策・努力が無意味でないことを示している。

キーワード：レポート作成、独創性教育、要約作成、論評と感想、大学、教育

1. はじめに

この報告は、昨年11月8日の第4回研究会での発表[1]を整理したものであり、内容が重複することをお断りしておきたい。

「創造性をつくる」ことを目的に、「知性なき丸暗記」に抗する実験的授業を行った。テーマには、「レポートの書き方を教える」を選んだ。実験回数は2クルーである。今のところ成果は多くはないが、問題点は浮上している。レポート学習のプログラムを注意深く構築することで学生らが独創的レポートに接近しやすくなること、同時に「低下した社会性」への対策も必要なことが示唆された。

問題意識、授業実験とその結果、考察を順を追って紹介する。

2. 問題意識

筆者は情報系の講義(システム工学、情報システム論、情報デザイン論、情報コミュニケーション論、WEBデザイン論、情報社会論、ほか)を専門学校と大学で約28年間行ってきたが、願わくば、本来の学習目的のために、最初の課題から学生が難なくただしくレポートを書ければ学習効率と論理的理解に大いに役立つと思われる。しかし、期待はいつも裏切られるのである。

まず、第一に学生は小学校-中学校-高等学校の文章指導で感想文以外ほとんどのジャンルの文章を書いていない。レポートの指導を受けて大学に入る学生はほぼ皆無で、筆者が遭遇する幸運な例外学生は年間250名ほどの学生の0-3名ほどである。

第二に、「レポート」という名のもとで感想文(読書感想文など)を書いた経験はあっても、報告文としてのレポートは書いていないという事実もある。

実際、論理的思考のために、学生らがレポートを正しく書けるようにすることが、筆者にとってはどの講義でも最初の仕事になっている。

一方、最近2年ほどは、新入学生たちに一つの変化が見られるようになり、文章の要約を書くことには著しい進歩がみられるようになった。論理的思考を育てる、という政府の方針などに沿って、「要約」の学習が、塾や高校、予備校で盛んになっていることが学生らの話から伺えるところである。

しかし、要約もまたそのままではレポートではない。他人の考えをそのままに私説を交えずに短くするのが要約である。そこに独創性があるとはならない。他方のレポートには独創性が不可欠である。

3. 学生の実情に合わせた独創的レポート作成指導
これまでは、その都度の試行錯誤でレポート作成

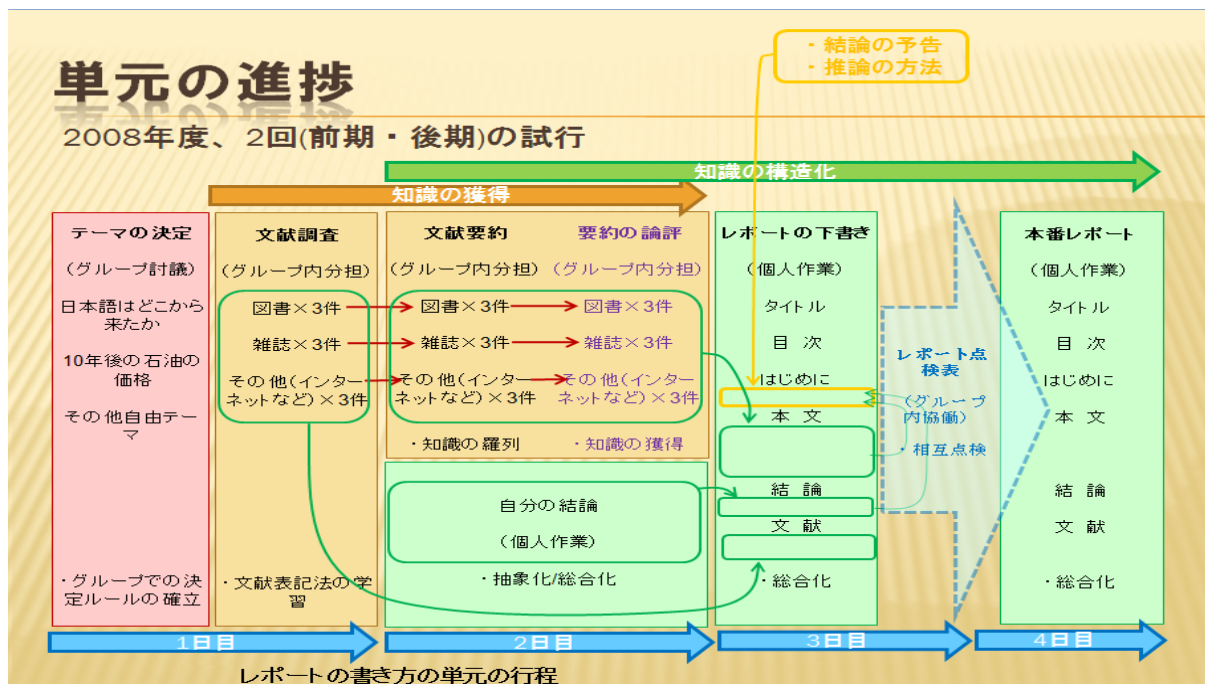


図1 レポート学習のプログラム[3]

を指導してきたが、今回は、レポート作成法の学習の定型化を目指してあえて実験のための授業計画を実施した(図1)。対象としたクラスは1-2年生の混成クラスである。

なお、この学習で採用したレポートの様式は、木下[2]の方法に準拠している。完成レポートは、「タイトル」「目次」「はじめに(結論の予告と論証の方法)」「本文(論証)」「結論」「文献」から構成される。

実験授業の結果は表1に示した。実験的授業は2クルー行われたが初回(前期)の成績が芳しくなかった。初回には文献要約に対して「論評」を書かせる工程がなかったので、2回目(後期)では文献要約に対して「論評」を書かせることにした。この工程の脱落学生の比率がやや増加したが、のちの工程の脱落率は初回より少なく、総合的脱落率は小さく、結論の記述内容も向上し、平均成績も向上した。

なお、筆者の教室はすべて学生参加型授業が実施されているので、学生のグループ内でレポートの相互評価を実施することでレポートの完成度を高めている。一方、この結果を見ると、この工程での脱落者も少なくない。

4. 結論

学生らに独創的なレポートを書く能力を身につけさせるためには、「論評」を書かせることが有効であることがわかった。

表1 授業実験とその結果[1]

計画 (提示した課題)	種別	クルー-1				比較	クルー-2			
		週	出席	成果	平均成績		週	出席	成果	平均成績
(0)文献表記の教育	一斉講義			100%	—			100%	—	
(1)テーマの自主選択	グループ課題	1	32名	32名	100	1	17名	15名	100	
(2)文献調査と文献リストの作成				100%	88%			29名	89	15名
(3)文献の要約とそれぞれの論評	多量の知識を獲得する過程			21名	92			9名	72	
				要約だけ	>			要約+論評	>	
				66%	>			53%	>	
(4)レポートの「結論」の原案	個人課題	2	27名	15名	32	2	14名	7名	60	
				52%	>			41%	>	
(5)レポートの下書き	知識を構造化(メタ化)およびネットワーク化する過程			18名	45			12名	40	
				62%	<			71%	<	
(6)下書きレポートの相互評価		3	25名	20名	88			12名	85	
				74%	<			86%	<	
(7)レポートの完成		4	22名	9名	62	3	9名	7名	70	
				36%	<			70%	<	
...					
最終講義時				27名				?		

問題点は、例年以上に「つらい課題はやらないことが正義」と感じている学生が多く見られたことである。ゆとり教育の影響かどうかはわからない。

参考文献(口頭発表含む)

- [1] 木下是雄, レポートの組み立て方, 269pp. 筑摩書房(1994)
- [2] 飯箸泰宏, 情報コミュニケーション学会第4回研究会, 発表資料(2008.11.08)
- [3] 飯箸泰宏, 情報コミュニケーション学会研究報告, 5(2), pp.14-15(2008)より不備訂正して引用